



東栄町分科会

10/12(金)

花祭会館



パネルディスカッション 田舎で創ろう！ ～発展と継続の戦略～

全国過疎問題
シンポジウム2012 in あいち

【東栄町分科会】

「田舎で創ろう！
～発展と継続の戦略～」

東栄町分科会
「田舎で創ろう！」
～発展と継続の戦略～

岩崎正弥
Iwakasa Masayoshi

松本新吾
Matsumoto Shingo

新弘之
Nihiyuki

西田みつ恵
Saita Mitsue

大橋 聡
Ohashi Satoshi

「田舎で創ろう！ ～発展と継続の戦略～」

コーディネーター

愛知大学地域政策学部教授

岩崎 正弥

いわさき まさや

静岡県生まれ。1984年京都大学農学部農林経済学科卒業、1995年同大学院農学研究科博士課程修了。博士(農学)。1996年愛知大学経済学部専任講師、その後、助教授、教授を経て2011年から現職。2009年～2010年、愛知大学三遠南信地域連携センター長。主な出版物は、『農本思想の社会史』(京都大学学術出版会)、『場の教育』(共著：農山漁村文化協会)、『現代山村経済と過疎—三遠南信の現実から—』(日本民俗学)など。



パネリスト

鹿追町農業振興課長

松本 新吾

まつもと しんご

北海道生まれ。1984年1月鹿追町に採用、農業委員会に配属される。管財課、北海道庁派遣、総務課財政係長、町民政策課政策係長、企画財政課行財政改革推進係長、企画財政課長を経て、2010年4月から現職。2007年10月に完成したバイオガスプラントの運営を町とともに担うバイオガスプラント利用組合の組合長も兼ねている。



株式会社のろし代表取締役

新 弘之

しん ひろゆき

石川県生まれ。2009年1月28日の設立総会において、「株式会社のろし」の代表取締役に就任。発起人のひとりとして会社設立に向け尽力したほか、地域産物の販売拡大や体験の受け入れなどにより地域が活性化するよう、地区のまとめ役として現在も奮闘中。「株式会社のろし」を更に発展させるため、おからを使った新商品開発や鮮魚の1次加工商品の販売などを模索している。他にも珠洲市区長会連合会会長や新工務店代表を務めるなど多方面で活躍しており、地区のみならず多くの人望を集めている。



八女市元気プロジェクト統括リーダー 慶應義塾大学総合政策学部非常勤講師

西田 みづ恵

にしだ みづえ

福岡県生まれ。2012年慶應義塾大学大学院政策メディア研究科博士課程単位取得退学。現在、同大学総合政策学部非常勤講師。佐賀大学理工学部、東北公益文科大学の非常勤講師を兼任。2005年、地域の若者アントルプレナーシップ育成プロジェクト「VITA+」を立ち上げ、高知県、佐賀県、和歌山県、神奈川県、鳥取県などに展開。2010年度より八女市元気プロジェクト、2012年度より三重県尾鷲市元気プロジェクトの統括リーダーとして、地域大学連携の新たな可能性を探索しながら、活動中。



NPO法人てほへ副理事長

大脇 聡

おおわき さとし

岐阜県生まれ。1992年日本福祉大学附属高等学校和太鼓部部长として全国高等学校総合文化祭に参加、郷土芸能部門最優秀賞を受賞する。1993年和太鼓集団「志多ら」に入団し、2010年まで舞台上に立つ。この間、「志多ら」は2002年第1回東京国際和太鼓コンテスト最優秀賞(組太鼓部門一般の部)受賞。2011年「志多ら」総合統括プロデューサーに就任。2012年「志多ら」が「奥三河ふるさと観光大使」に任命され、全国ツアー「蒼の大地」(全国50カ所予定)をスタートさせる。NPO法人てほへでは2010年5月から現職、「蒼の森ふるさと暮らし塾」「奥三河のき山放送局」など様々な体験交流や情報発信を企画運営している。



岩崎 それでは、よろしくお願ひします。東栄町の分科会のテーマは「田舎で創ろう！～継続と発展の戦略～」ということですので。パネルディスカッションではこのテーマに沿って、活動を継続していく、さらにはその活動を発展させるためにはどうしたらいいのか、というようなことについて、パネリストの皆さんと意見交換したいと考えております。

昨日の全体会でも「地域づくりは人づくり」だと、そういうお話も出ておりました。東栄町では、これは東栄町に限らずおそらく全国どの過疎地域でも同様の問題を抱えていると思われるのですが、活動は何か始まると、ところが何年かすると次第に疲れて、活動が停滞してくる、元気が失われていく、あるいは思うような効果が上がらなく、意欲が低下していく、とそういう状況があるということをお聞ひしております。それではどうしたらいいのか、ということですね。

今回は幸いなことに4名のパネリストそれぞれ異なる立場で様々な活動をされております。そういうパネリストに来ていただいておりますので、どちらかという活動の裏面に光を当てていただきまして、困難をどうやって克服したのか、あるいは、現在抱えている、直面している困難をどのように克服しようとしているのか、といったことについて分かち合いをしたいと思っております。

しかし、このパネルディスカッション、時間が45分程度しかございません。できればパネリストの皆さんには三度くらい発言していただきたいと思っておりますが、ちょっと時間の都合でどうなるかわからないということをおあらかじめご了承くださいたいと思ひます。

それでは、まず一巡目としまして、それぞれの活動の失敗談、苦勞話、活動の障害の実際、そういったことについてお話をしていただきたいと思ひます。松本さん、新さんは先程の事例報告と重なる面があるかもしれません。また西田さん、大脇さんはお自身の活動の紹介も含めてお話をしていただければというふうにお思ひます。

それでは松本さんからよろしくお願ひいたします。

松本 それでは私の方から、これまでの経緯を含めてお話をさせていただきます。

先程お話ししましたバイオガスプラントというのは、日本中ではあまりありません。ただ九州ですとか、京都ですとか、そういったところでもバイオガスプラントとい

うものは建設をされております。ただ数は、国内では非常に少ないという状況になっております。そういった中で、鹿追町で始めるときに、なかなか事例が少なかったということで、それを実際に利用してもらった農家さんが、どのような仕組みで、どのようなものができて、それがどんなふうに分ちたちの利益になるのか、ということが非常にイメージしづらかったというところがありまして、建設するにあたっては農業者の方々の理解がなかなか進まなかったというところがまずあります。

それと、先程の家畜の糞尿については、各農家さんから、中心にあるセンターに収集・運搬するのですが、公道をそういったトラックで運ぶということで、道路に洩れたりしないのかとか、道路で運んでいいのかとか、そういったような疑問ですとか心配もありました。また、最終的にできる消化液というのは液体ですから、液体を畑に散布するということは、非常に畑が固くなってしまつて作物の生育に悪い影響が出るのではないかと、というようなことで、心配の種というのは当初、非常に尽きない状況でございました。

ただ、3年目ぐらいからそれを実際に使っていたというところで、それぞれの農家さんが「これは自分たちでも利用していいものだ」ということが、少しずつ実感されて、経験を伴って実感したということが、現在、皆さんがよりよく使っていただける状況になったということかなと思ひます。ただ、利用者の方も、お金を払わなければ処理はできません。それに伴って自分たちがどういった仕事に向けるのか、ということで経営も考えているという状況にあります。

以上です。

岩崎 どうもありがとうございました。

続いて「のろし」の新さん、よろしくお願ひいたします。

新 私たち、ついさっきもお話ししたように、なかなか、苦勞話と申しますか、市長さんの言われたように、第一集落と第二集落を交えてというお話がありましたのでなんですが、狼煙の集落は、漁業の、主な集落は半農半漁で、漁業を主に頑張っております。そして気性も荒いけれども、まず決断力はあります。そこで、横山という第二集落は農業一本の集落で、小さいながら頑張つて、お金は、狼煙よりもたくさん貯金などはしておりますけれども、度胸がなくてなかなか私らの言うことを、どう言つていいか、交わらないようなかた



ちの集落でした。そこで、まあ…うまくいくかな、と
思っているいろいろと何回かの相談のうち、ま、どうか
そこまで辿りついたようなわけなのですが。それで、
大浜大豆という大豆は横山集落で持っていますから、
あんたら一生懸命に作ればお金になるしということ
で、それでもまだ出店をする、出すお婆あちゃんたち
が車に運んでくれるかという、ちょっと1キロほどあ
るのですけれども、運んでもらわれんかという、なか
なかきついことも言っておりましたけれども、「そん
なもんもできるん?」と言ったら「簡単や」というこ
とで、どうか開店にこぎつけまして。今は第一も良
かったし、第二さんも良かったかと、二つが今まで背
中合わせのような集落であったけれども、この建物
のおかげで本当に丸く収まっておるような現状ですが。
これがどうなるか、まだ先が長いですからわかりませ
んけれども、本当になかなか、ちょっと1キロほどし
か離れていない狼煙町なのですけれども、価値観と言
いますか、そういうものはありまして、なかなか本当
に…。まあ、市長さんの言われたように、交えて本当
によかったなあと、今はそう思っております。これか
らもそのようにあってほしいと、私は思っております。

岩崎 どうもありがとうございました。

それでは、続いて西田さん、活動報告も含めてよろ
しく願いいたします。

西田 西田です。よろしく申し上げます。

私は、昨日、基調講演をさせていただいた飯盛と一
緒に、2005年から地域大学連携を進めさせていただ
いております。現在は、福岡県八女市、高知県本山町、
そして昨日もお話をさせていただいた三重県尾鷲市で
「三重県尾鷲市元気プロジェクト」という形でプロジェ

クトをさせていただき、私はそこの統括リーダーを務め
ております。その中で、よそ者、若者である大学生が地
域に入らせていただき、住民の方々と一緒にその地域
にある思いをどのようにしたら実現に持っていけるか、
を共に考えながら実践をさせていただいております。昨
日、飯盛の資料にありましたが、プラットフォームアー
キテクチャーという立場で場作りをさせていただいてお
ります。

今日、活動紹介ということで一つだけ、プラットフォ
ームアーキテクチャーの場作りの視点からお話をさせ
ていただきます。昨日お話をさせていただいた「三重
県尾鷲市元気プロジェクト」です。このプロジェクトで
は、三木浦、三木里、早田、九鬼という4地区に40名
の学生が入りました。慶応の飯盛研の学生30名と三重
大の学生さん10名が各地区にも分散して入り、同時に
それぞれの地区で同じことが起こるような、つまり対等
にその地区が、同じ活動が起こるような仕組みを作りま
した。

なぜ、このように入ったのかと申しますと、福岡県の
八女市さんに3年前に入ったときの経験からです。八
女市さんは、市町村合併で5市町村がまとまり、北九
州市に次ぐ第2位の大きさになっていました。そのとき
にも同じように、2泊3日の合宿で学生たち40名が入
ったのですが、黒木という町に入らせていただいて、ぜ
ひ地域の皆様一緒に交流しましょう、というかたちでお
声掛けしたのですけれども、黒木の方はたくさん来てく
ださったのですが、他の八女市内の地域の方々はほと
んどいらっしゃらなかったという状況が起りました。
後日聞いてみると、八女市は端から端まで車で2時間
くらいかかるような規模で、そこに私たちが入ってい
って1ヶ所に来てくださいます、確かに成り立たないなど。
そのときの経験から、今回、尾鷲市さんには、学生た
ちが分散して、そういう意味ではたくさん学生がいるか
らできたことなのですけれども、そういうような工夫を
しました。

ただ、一方で、分散してしまうと、今度は各地域が
どういうことをしているか共有できないので、フェイス
ブックグループで「尾鷲市元気プロジェクト」という
ひとつのページを設けました。皆さん、もしスマートフ
ォンなどでフェイスブックをお使いになられる方がいた
ら「尾鷲市元気プロジェクト」と調べていただけたらご
覧になっていただくことが出来ます。そこでは各地域の
学生が「尾鷲市元気プロジェクト」の合宿をしている

間に、各地区の情報をそのページにアップにしていき、各地区で情報量を競い合うという仕掛けを作りました。例えば、今、三木浦地区ではこういうことをしています、九鬼地区では地元の方にこういう話をさせていただきました、ということをごんごんアップしていくことで、そのフェイスブックグループ上では、4地域が共有できるようにしました。

この2泊3日の合宿の中で、学生と、市民の方もフェイスブックグループに参加して情報を挙げていき、2泊3日でなんと2,610のコメントがあがりました。おそらく一つの地域で、2泊3日で、これだけのコメントがあがるというのも、なかなか無いことではないかなと思いますし、これがきっかけで情報発信が促進されるということが起こってきていると伺っております。

このようなことをさせていただいておまして、難しかったこととか、このような活動をさせていただいて、ポイントだなと思っていることが2点あります。いくつもあるのですが、大きなところは2点かなと思います。一つは、私たち、学生たちが、つまりよそ者・若者が入るのですが、大抵の場合、「若者が何かしてくれるのね。」「大学生が何かしてくれるのね。」と受け身の態勢でおられます。ただ、私たちはそういうふうな形で関係性を築いて進めていきたいわけではなくて、あくまで、地元の方が主人公で主体となって進めていくために、学生たちがきっかけとなるのが役割であると思っておりますので、受け身になられてしまっては困るところがあります。これは、住民の方だけでなく、市町の職員の方も「お任せします。」とおっしゃられるので、ここをどう、住民と職員、つまり地域のプレーヤーが主体的になっていくようにするか難しいところの一つだと思っております。

二つ目が、「よそ者・若者」で入っているので、その「よそ者・若者らしさ」というのがどこまで地域の中で生かせるかというのがポイントになってくると思っております。地域の中の、もともとのルールなり、いろんな文化というのがありますが、「よそ者・若者」はそれらを超えて、別の視点から、いろんなことを話します。それを地域のルールに当てはめようとしてしまうと、せっかくの「よそ者・若者」らしさというのが生きてこないのです。そのため、ここをいかに寛大に受けていただきながらも、裏で上手に調整をしていただく方が市町の職員や、住民の方々に居てくださるかどうかが、私たちが共にまちづくりについて考え、動かさせていただ

くための大きなポイントかな、というふうに思っております。

岩崎 折り合いの付け方の難しさというのが、同じ大学人としてとてもよく分かりました。

それでは最後に大脇さん、同じく活動紹介も含めてよろしく願いいたします。

大脇 よろしく申し上げます。「NPO法人てほへ」副理事長をしております大脇と申します。

今日も東栄町の関係の皆さんいっぱいおりますので、ちょっと緊張していますが、全国からみえている皆さんもおりますので、私たちの活動等を、ちょっと紹介をしながら、話をさせていただきたいと思っております。

「NPO法人てほへ」というのは、今日、お手元に、皆さんのところに資料が、東栄町の町の資料等含めて、こういう「志多ら」と書いてある太鼓の写真の付いた資料があると思っております。ここに、私たち「NPO法人てほへ」を作るきっかけになっている「和太鼓集団志多ら」の資料、それからNPO法人の資料を入れていただいております。細かいところは、それを見ていただければわかると思うのですが、私たち「NPO法人てほへ」というのは、2年前に「和太鼓集団志多ら」が、地元の方や、「志多ら」を応援する全国の皆さんと一緒に、「志多ら」の地元の奥三河、東栄町を、元気に活性化させていくようなことを、「志多ら」を旗振りにできないかということで立ち上げたNPO法人です。私も実は、職業は和太鼓「志多ら」の太鼓打ちでした。今は総合統括プロデューサーということで舞台は下りて、こういうところに、撥をマイクに持ちかえて参加させていただきながら、私たちの活動やどういう思いで「志多ら」が演奏しているのか、「NPO法人てほへ」をどうして立ち上げたのか、どうしていきたいのかということをご皆さんにお話ししながら、このパンフレットにも書いてありますが、「人を結び、命奏でて、伝統を舞う」と、こういうテーマのもとに活動しております。

私たち「和太鼓集団志多ら」、今日の午後に、この中にも、私たちの稽古場に一緒に行っていただく皆さんもおります。今、東栄町に、11ヶ所、花祭りが残っている集落があります。その一集落、東菌目というところの廃校になった小学校を、平成元年に閉校になったのですが、その後、お借りする縁が、たまたまそういう縁ができて、東栄町に移り住んできました。私

も含め今、「志多ら」のメンバーは16名です。全員、Iターン者。ほとんどがもう、東栄町に住民票を移して、東栄町民です。その経緯はこの資料の中に一枚、白黒のを入れていただいたのですけれども、『季刊地域』という雑誌に、今月発刊されたばかりですけれども、これに私がちょっと文章を書かせていただきました、載っておりますので、またお読みください。

平成元年にこの東栄町に移ってきた「志多ら」が、「若者が一つ屋根の下で太鼓を叩いて何をするんだろう。」という、当然、田舎の人はそう思うわけですね。そこから、私たちがこの20年、24年目になるのですけれども、どう自分たちの活動を地元の人たちにも理解してもらってやっていくかということが、すごくやはり時間がかかったというか。私たちは太鼓が好きで、太鼓が大好きでプロの道に進んできているので、変な話、太鼓だけに向かっている、周りのことは耳を塞いでいけば、それでも成り立つわけですね。基本的には外へ演奏に行きます。今日も、同じ東三河の伊良湖中学校の学校公演にメンバーは、朝4時か5時くらいに起きて出発していきましたが。そういう形なのですが、こういう太鼓、今日も、先程、花祭りを見ていただきましたけれど、太鼓とか芸能というのは、僕はここで住んで暮らすようになって、生活とこういう芸能、ここの祭り、地域に根付く祭りというのは、そこに住む人の生活の一部、生活イコール祭りという暮らしがあるのだというふうに実感しています。これは自分も、私はもうすぐ38になるのですけれども、もう東栄町に来て19年くらい経つので人生の半分は東栄町ということになってきて、だんだん地元の人たちの、地元の祭りだという感覚が凄く理解できるようになってきて。そういう生活の一部の中にある祭り、そういうものが凄く大切にされているこの地域の中へ、若者がどっと入ってきて、太鼓を打つ集団だと。まあ、いろんな思いを持つ方もいっぱいいます。実際に、花祭りが『志多らの花祭り』になっちゃうんじゃないか。」とか。あとは、「志多ら」が有名になったら「どうせここで有名になったら外へ行っちゃうんだろう。」というような噂が立ったりとか。そういうことは当初はありました。

それは、私たちも変わった集団ですので、しょうがないなと思いつつ、ただ、やはり自分たちが、正直に自分たちの夢に向かってやっている姿、そして生活の一部である芸能、太鼓に携わっていくということで、普段の中で、地元の人たちをしっかりと意識しながら、日常の朝、20kmくらいを山の中を毎日、雨降ろうが雪降

ろうが走るのですね、トレーニングで。そういうときに、畑で朝仕事をしているおじいちゃんおばあちゃんに声を掛けて、そうすると、地元のおじいちゃんおばあちゃんは「お前ら、ちゃんと食べてるのか。毎日、太鼓ガンガンガン叩いてるけど、そんなに体力使って、食べるものちゃんとあるのか、食えてるのか。」という心配をしていただいて。公演から帰ってくると、玄関の前に野菜がどかっと。誰の名前って書いてないのですよ。一番、私たち困ります。お礼言いたいのに。でも「誰だろうな」って見ていると、いつも、グラウンドでゲートボールをおじいちゃんおばあちゃんやっていたので、「すみません、あの、どなたか野菜を置いていただきましたか。」というところから、私たちの活動をだんだん知ってもらって、「ああ、こいつら本気でここで生きていこうとしてるだな。」というように感じてもらったのがきっかけで、だんだん私たちの太鼓の活動を知っていただけて、24年経っています。

私たちとしても、本当にヨチヨチ歩き、本当にその頃は「志多ら」が、今は有限会社にしたのですけれども、当時は会社じゃなかったの、「山の財布」と言ってみんなで演奏料をもらってきたのを分けながら生活していたのですけれども、通帳に1万円しかなかったのですね。これで演奏の糧になる笛を—1万円くらいするのでプロで使う笛は—それを買うのか、野菜を買うのかどうしようか、って迷った時もありました。そういう時から本当に皆さんに助けももらってきたので、私たちとしても「志多ら」が少しずつ大きくなってきて、そして、この芸能の町で育ってきたということが「志多ら」のバックボーンにありますので、そこが元気になるような活動を「志多ら」もやはりしたい。そして、それは「志多ら」だけがするのじゃなくて、地元の方たちと一緒にやりたいということで、NPO法人という形で2年前に立ち上げました。

ただ、やっぱりなかなか「志多ら」というグループも大きくなってきて、会員さんにならないと活動できないのかとか、どこで情報をやって、どういう活動をしているのかということが、まだまだ、私たちのほうも情報発信不足で、地元の方たちにも、だんだん知ってはきてもらってはいますが、地元の人たちを支える側に早くなりたいなと。引っ張る側ではなくて裏で支えて、地元の人たちと一緒に東栄町を盛り上げていくような形にしていきたいなということが、今の喫緊の課題かなというふうに思っています。

以上です。

岩崎 「志多ら」の皆さんは、根付きの住民とともに住む、「共住」という言い方をされて活動をされているということですね。

それでは、今の苦労話等々の中に既に克服をした経験も若干入っていたのかなというふうに思いますが、二順目としまして、実際に活動を継続してさらに発展させてきた中で、どうやって困難を乗り越えたのかと、そのあたりについて二順目でお話をさせていただければというふうに思います。

今度は大脇さんのほうからよろしいでしょうか。じゃあお願いいたします。

大脇 私たちは、先程もお話したようにちょっと特殊な職業ですので、創作活動をここの奥三河でしています。そして、できた曲を全国いろいろな会館や子供たちや学校やイベントや、いろんなところで公演をするわけですね。なかなか、やはり地元の方と直接、交流するという機会が、なかなかないわけですね。私も19の時に「志多ら」に来たのですけれども、そんなプロに行っても、親も含め周りも含め、本当に食っていけるのか、という心配をされてきたのですけれども、本当にここで成功して「志多ら」がずっと続いていくような集団にするには、家庭を持ってでもやっていけるような集団じゃないと絶対に無理だ、と僕、勝手に思いました。たまたま相手がいたものですから、20代前半の頃に結婚しようと、結婚して自分たちが食っていけなくなったら「志多ら」も食っていけないだろう、と勝手に僕は自分の中で決心しまして。今、中学校3年生と保育園年長の子供が二人いるのですけれども、本当に東栄町の花祭りやいろんな東栄町の文化に触れながら大きくなってきてくれていて、「志多ら」も含めていろんなメンバーの子供たちがどんどん増えています。閉校になった時には小学校最後4名の生徒だったのですけれども、今東蘭目集落で32軒くらいだと思うのですが、子供たちだけ出すと10人以上いるのですね、うちの代表やメンバーも含めて。代表は女性なのですけれども、地元の方と結婚しています。子供も授かっています。そういう形で、「志多ら」の太鼓という顔じゃない顔で地域に関わるきっかけを作ってくれたのが子供たちで、その子供たちから、いろんな同世代のお父さんお母さんや、他の地域の方や、いろんな



方と、「志多ら」のことを知ってもらいながら、まあ、実際なかなか聞けないと思うのですよね。「志多らの子、知っているけど、どうなの。」「志多らってどうなの。」って、なかなかやっぱり聞けないというのを、子供たちがうまくそういうところを、地元と「志多ら」を結んでくれたなあというふうに思っています。

そういう面では、花祭り11ヶ所、継続されて700年も続いているお祭りなのですけれども、これを今後続けていって、やっていこうと思うと、応援団が千人、一万人、何百人いても祭りをやる人がいなくなれば祭りはできないわけですね。なので、やはり本当に、だんだん応援だった人がこの町に住みついて、第二の「志多ら」、第三の「志多ら」じゃないのですけれども、ここで仕事も何かできるような形ができて、住みついて、ここで一緒に暮らす人、ここで生まれ育った人たちと一緒に、共に暮らしていけるようなまちづくりができれば、祭りは継続できるかなと。祭りがなくなったら集落もなくなっちゃう、かな？とちょっと思っていますので、絶対にそれだけはならないように、今から、東栄町も小学校、中学校が1校ずつしか、小学校1校、中学校1校ですので、子供たちに、ここの、ふるさとの教育をしっかりして、ここの誇りを胸に持って大きくなって、またここで暮らせるような、そして、そういう誇りを持った子供たちが、出会ったいろんな人たちが、また東栄町に関心を向けてくれて、ここで暮らしていけるような町ができていけばなあというふうに思っています。

そういう思いでは、自分のたちの仕事だけじゃない、地域に出て行ったということが、今の「志多ら」を皆さんにもより知っていただいて、関心を持っていただける、そしてNPOまで作って活動できる形にしていってくれたのかな、というふうに思っています。

岩崎 どうもありがとうございました。

では続いて西田さん、よろしくお願いいたします。

西田 先程、二点ポイントがあるということで、一つ目は住民の方が、私たちが入ることで受け身になってしまうということと、二つ目に「よそ者・若者」らしさをどう地域の中で生かせるかということ、がポイントだというふうにお話させていただきました。一つ目の方について、私たちがどういう工夫をしているかお話をさせていただきたいと思います。

地域の中で実際にずっと住まわれて、活動されて、またIターンで来られた大脇さんなどのような方も、ずっとそこに住まれて活動されている方の姿を見ると、本当に頭が上がらないような思いなのですけれども、そのような中で私たちだからこそ、皆さんのお役に立てるかなと思っていることがあります。私たちの役割は「主体化のリレーの第一走者になること」なのではないかなというふうに思っています。主体化のリレーというのは、主体化というのは主体的になるということで、自分でも何かこうしたらいいんじゃないかと思ってみるとか、実際それをやってみようとか、チャレンジしてみようというふうに主体的になるということなのですけれども、それをリレーをしていくというのは、私たちはまず、元気のある学生たちがまず動いてみるということで、バトンを持って走り始めます。それをうまく住民の方々にバトンを渡すことで、学生さんがこんなに走ってくれたのだからじゃあ自分たちも走るよ、というような形でバトンをつないでいき、その住民の方々が走っているのを見てまわりの住民の人もまた、じゃあ自分たちも走ろうよ、というふうになっていくための、まずは最初のきっかけであれば私たちは作らせていただけたらと思っています。

地域の中だけで新しいことを興すというのは、非常に



大変なことだと思います。普段の生活の中で新しいことを興そうと思うと、変に目立ってしまったり、その土地で過ごしにくくなるようなこともありますし。新さんはお名前のように新しいことをどんどん興されているので素晴らしいなと思ったのですが、みんながみんなそうできるとは限りませんので、代わりにまず活動を興す、というのを学生たち、私たちがまずさせていただく、ということがひとつの役割なのではないかなというふうに思っています。

そうすると、地元の方だと興しにくくても、「よそ者・若者」だったらまあ仕方ないなと、よそ者だし若者だし、というふうになってくるのが第一ステップです。次は、これを、ちゃんと走ってバトンを渡せるかというところが大事で、そのためにはいくつか段階があると思っています。まず、学生たちが一生懸命に地元のことを考えて動くというところで、主体的に動く姿をお見せすることだと思っています。うちの学生たちだけではなく、学生、大学生は地域の皆さんのために本当に一所懸命考えて動きます。そういう姿勢を見て、地元の方がまずは動いてくださればいいなというふうに思っていますが、ただ、それだけでは動かない、なかなか見ているだけということになってしまうと思いますが、その中で学生が何か新しいことを提案させていただくことで、新たな視点というのをお伝えして、「そこにも魅力があるんだ。」と心が動き、もしかしたらその時点でバトンを受け継いでくださる方がいらっしやと思います。

でも、まだまだその時点でも学生がずっと走り続けなければいけないという状況になるときには、提案したことを提案するだけではなくて、一緒にやってみましょうと、学生が「まず自分たちもやりますから住民の方も一緒にやりましょうよ。」という形で、一緒にやってみる、実験をしてみるということをしております。そうすることによって地元の方も「あ、なんだ、こういうふうによればいいのね。」ということがわかってくるようです。よく住民の方々から、何かしたいと思っているけど、どうすればいいのかわからない、というようなことをおっしゃられます。そのため、学生たちが一緒に動かさせていただき、きっかけを作らせていただくと「あ、こうやって走ればいいんだ。」ということがわかると、その時点でバトンを受け取ってくださるかなと思っています。

もう一段階、うちの慶應義塾大学だからこそお役に立てることかなと思っていることが、私たちは地元の大学ではないので、ある意味、時々しか、来ることができ

ません。それをよく思われない方もいらっしゃるかもしれませんが、敢えてメリットとして使わせていただくと、学生たちが行ったり来たりしますので、来た時に「次、来るまでにぜひこの提案を実行してみてくださいね。」というふうな形で住民の方々と約束をすると、住民の方々も、次、学生が来る時のためにじゃあこれを見せてあげよう、という形で少し行動を起こしやすくなるようです。そのため、時々来ることで、また普段はフェイスブックだったり、メールだったり、で情報を共有しながら、関係性を築かせていただくことで、学生が走っているバトンが住民の方々に渡って、住民の方々もバトンを持って走るようになっていけばいいなと思いながら、場作りをさせていただいております。

福岡県の八女市さんは今年で3年目なのですが、1年目は本当に皆さん「学生さんががんばってね。」という所から始まったのですが、今は「これだけ学生が頑張っているんだから自分たちもやらなきゃね。」ということで、住民の方々のコミュニティが立ち上がり始め、自分たちも頑張っていこうと、新たな活動がそこから生まれてきているような状況です。

岩崎 わくわくするような話をどうもありがとうございます。

それでは続きまして今度は新さん、よろしくお願いします。

新 私たち株式会社は、まず、昔からことわざがありますが「石の上にも三年」、どうにか三年過ごしているいろんことを考えてはいますけれども、今現在、そういう、自分とこの商品開発が一番儲かるし、人の作ったものを売っておるのでは、まず駄目ということは、常に私の頭の中にあるのですが。

お年寄りを元気にするときは、前は引っ込み思案ということが田舎にもありましたが、今は、お年寄りも堂々とお店へ、自分ののが、売れとるか、売れとらんか見に来るようになりまして。町の中心の中に年寄が家に閉じ込めとるようなことのないようになったのも、ひとつの狼煙を元気にした証かなと私は思っておりますし、これからもそうあってほしいし、私も今、はや、だいぶん老い（年を取ったという意味）ですから、これから若い人に任せてかんと具合悪い。株式会社もどこまでどうして横山集落との仲の良いところを見つけて、これから、わたしら日置地区といいますが、本当に高齢社会であり

まして、日置地区の中でもやはり、狼煙第一・第二が、一番元気が出ていますし、これから、そうして仲よく続けていきたいなと思っております。

以上です。

岩崎 なかなか、活動をコミュニティビジネスまでつなげるというのは非常に難しいことだと思うのですが、それをやっておられるということで、すごく励まされました。

では、最後に松本さん、よろしくお願いします。

松本 家畜の糞尿というのは、農業者にとって肥料にはなるんですが、その反面、管理する、あるいはそれらを散布するというのは、非常に厄介なものという面もございます。それが今は、ある面から見ると同じものであっても「資源」というような見方ができているのかなというふうに思っています。

これは、同じものを、ある過程を通して、その中から新たな肥料、そういうものが生まれると。その過程の中でさらにエネルギーも作ることでできると。今、再生可能エネルギーというのはいろんな面で注目を集めており、その中でも太陽光発電ですとか風力発電というのは、非常に全国的にも注目を集めておりまして、北海道では「本州の大手の会社がメガ単位の太陽光発電を作りたい」というような記事がよく新聞に載っております。ほかのことを悪く言うわけではないのですが、太陽が出なければ太陽光発電はできませんし、風が吹かなければ風力発電はできないというのが現状で、それに対してバイオガスは、そこで農業をする限り、家畜を飼う限り糞尿が出て、それが原料となって永遠に消化液というものができ、安定したエネルギーが発電できるというのが、ほかのものとはちょっと違うのかなと思っております。

そういった中で農業をやることによって、他の地域との農畜産物の差別化ですとか、そういったものをこれからはしていかなきゃならないのかなと思っておりますけれども、先程もお話させていただきましたけれども、農協も系統によって一元集荷されておりますので、なかなか差別化は難しい現状にありますし、そのためには科学的な根拠も広く皆さんにお知らせできるような態勢にしていかなければならないのかな、というふうにも思っております。

町内では2基目を作っていますけれども、エネルギーという面でのこともありますが、本来の目的で



ある家畜の糞尿処理をして、それを適正に利用していく、そこから生まれる農業が安心して安全なものであり、酪農家、畑作の方もそれをもとにしてやることによって経営を拡大したり、生産性が上がった、ということにつながるようなものとして、私の町では皆さんどちらかといえばハードを手段として振興しようとしていますけれども、これを今後も進めていなければいけないのかな、というふうに思っています。

岩崎 どうもありがとうございました。

ゴミではなく資源ということで、まさに昨日、飯盛先生の方からお話のあった「資源化の過程」を実践されているということ、改めて確認いたしました。

当初は少し時間がないのかなというふうに考えていたのですが、あと10分ほどございます。最初は、ぜひメールを、ということでパネリストの皆さんにはお願いしておりました。しかし少し時間がございますので、メール、プラス、他のパネリストの発言を受けて、ここはこう思うとか、こんなところが参考になったとかそういったことも併せて、あるいはご自分の活動でこれからワクワクするような夢、そういったことを最後にお一人ずつお話していただければというふうに思います。

それでは、今度はまた松本さんからお願いできますでしょうか。

松本 皆さんの話を聞かせていただきまして、新さんのところでは「人の作ったものを売るのではなくて地域の人を作ったものを売っていかなければならない。」というのが、やはりこれからも継続していく大きなヒントなのかなというふうに思っています。また西田先生のほうからは「地域の人を受け身になるのではなくて自分たちからやっつけよう。学生はあくま

でも手助けなんです。」というのが、そこにもヒントが大いにあるのかなと。大脇さんのほうからは、Iターンで入ってきた方が24年間この地で生活して、地域に溶け込む努力をしている、そういう受け入れる土壌もこの町にあった、というのが大きなことなのかなあというふうに考えています。

私は役場ですので、行政としては、まちづくりを進めるには「協働」という言葉をよく使って、住民と行政と議会が一体となって協働のまちづくりを進めましょうというようなことを、よく言ったり聞いたりしているのですが、やはり地域の住民、そこに住んでいる方々が主役になっていかなければ長く継続はしていかないのじゃないかなと。それを行政が少しずつ支援していく、という態勢であれば、地域の方々、自分の意志を持って進めて、それを行政が手助けする、というのが一番いいのかなというふうに、今思っております。手段としてはソフト事業ですとかハード事業ですとかいろんなことがあると思いますが、そういう形で私の町でも進めなければならないのかなというふうに思いました。

以上です。

岩崎 どうもありがとうございました。

それでは新さん、よろしく申し上げます。

新 まあ、あんまり私も能のない男ですから、なんです。私らの集落でも一緒、ここへ上がってくるまでの道のりを見てもわかるように、自分の野菜を作って売るのはじゃなくて、山菜がたいへんに多いように思うし、保健所もなかなかやかましい、農薬とかいろんな問題もありましてなんです。山菜は農薬もいらなし、そういうものを摘んで第一次・第二次加工で販売できたら、いちばん安心・安全でええがじゃないかな、と私は思っております。どうかそのように頑張っていたいただきたいと思います。私も頑張ります。

岩崎 じゃあ続いて西田さん、よろしく申し上げます。

西田 松本さんの鹿追町の事例からは、最初のご苦労のときに、事例が少ないのでイメージが皆さんと共有できなかったということがあり、そこでも、皆さんで意見を合わせていくことが非常に大事だなと思いました。新さんのところでも「度胸が出ない」という方がいらっしゃるときに何度も相談をしたということをお

っしゃっておりましたし、大脇さんのところでも、地元の方との交流をいかにするかということで。お三方の所に共通しているのが、話し合いなり顔を突き合わせてしっかり交流を取っていくことが大事だということのを改めて確認をさせていただきました。

これは、よそ者で入る私たちも同じことで、ときどきしか来られないですけれども、その時にしっかりと皆さんとお話をさせていただきたいな、というふうに改めて思いましたし、それがきっかけでまた、前に動くような活動をさせていただきたいなと思っております。

一番、最初に、岩崎先生の方から「活動が停滞してしまいがちだ。」というふうなお話がありましたが、竹って、しなやかにたかーく伸びていくのって、節目節目があるからなのですよ。その節目のように、私たちが入ることで、また新たな一歩が出せるようなきっかけになればいいな、というふうに、今後も思っております。ですから、今日のタイトルにある「発展と継続の戦略」という、まさにそのひとつとして私たち「よそ者・若者」をある意味使っていただいて、ぜひ地域が前に進むように持っていただけたらと思いますし、私たちもそのためにできることを精一杯させていただきたいなと思っております。

岩崎 ありがとうございます。

では、最後に大脇さん、よろしく願います。

大脇 地元東栄町のいろんな、ここの素晴らしいところというのは、やはりここで、常に日常あるものの中に本当の価値とか、本当の大切なものがある、というふうに思っています。本物なので気付かない、そこに住んでいればあたりまえなのかなあというふうに思っております。町場のいろんな学生さんやいろんな新しい目を見た時に、ここに、本当に、どんな価値があるのかとか、そういうものを発見してもらったり、そしてそれを、もう一度地元の人たちが勇気をもって、一歩踏み出すということが大事な、というふうに思っています。

僕は、ここの東栄町で骨を埋めるつもりで、覚悟で、ここで住んでいます。なのでこの東栄町のことが大好きですし、東栄町でいろんな活動をしている。いろんな地域資源がありこんなことできるじゃん、こんないろんなことがうまく絡み合っていくと、もっといっぱい人が来るんじゃないかな、って頭の中で妄想してワクワクしま

す。そういう人たちを少しずつでも増やしていきながら、そして長く時間はかかるかもしれないけれども、少しずつ結果が見えてくる。その結果というのは決してお金がもうかる、たくさん収入があって裕福になるとか、そういう結果じゃないと思うんですね。今日のテーマが「発展と継続」なので、継続していくには費用もかかりますし、お金もかかるのは当然ですけれども、その先にもっと大事なものがあって、それがこの過疎シンポで、昨日からいろんな話を聞かせてもらって、今日も話を聞かせてもらって、自分も参加していて、こういう田舎に本当の大切なものがあって、それがこれからの日本が進んでいく方向に絶対になる、というふうに思っていますので。ぜひ東栄町の関係者の皆さん、この町が本当に盛り上がっていくように、そう、ちょっとでも思っている方が少しずつでも仲間を増やしていく。地元に住む人を巻き込んで、それからIターンやUターンで戻ってきたり入ってきた人を、それから、まわりの学生さんや行政の皆さんも一緒になって盛り上げていく。東栄町の行政の皆さんは、行政の顔もあります地域の方々ですので、そういう人たちが、ひとつになってこの町を盛り上げていこう。そして、僕は、大事なのは他の町やいろんなところの参考事例というのは、よくよく参考にしながらも、東栄町独自の形を作っていくって、自分たちの町が誇りなんだと、ここの町、ふるさとが自分の誇りだと思えるようなことにつなげていかないと、なかなか続かないなと。

それから永遠に…永遠と言ったらあれかもしれないですけど、持続していこうと思うと、世代を超えて、子供たちも含め、大人やおじいちゃんおばあちゃんも含め、みんながそういう意識になっていけるような町にならないと、なかなか継続していくというのは、元気な人がいるうちはできるけれども、エンジンになっている人がいなくなるとできなくなっちゃいます、というふうになっちゃうなと思うので、そういうエンジンもすべて受け継いで、未来へバトンパスしていけるようなまちづくりを今からしたい、とワクワクして考えていますので、皆さん、東栄町がこういうところで発表できるような町にしたいなと、しようと思っておりますので、よろしく願います。

岩崎 ありがとうございます。

最後に私からも、大学人の立場として一言お話させていただきたいと思います。

ぜひ、やはり大学を活用していただきたいと思っています。ただ大学を活用するといっても、大学人からすると逆に悩んでいる、どうしていいかわからない、というような状況が実はあるというのが、多くの大学の実情だろうと思います。今日ご発言いただいたパネリストの皆さんのお話を通して、すでに地域には学びの資源がたくさんあります。しかし、大学はどうやってそれを教育プログラムにしていっていいかわからない。逆に地域は、地域振興にそれをどういうふうに結びつけていっていいかわからない。ということで、域学連携ということも昨日ありました。

大学を活用するといったときに、大学に「学生さん来てください。」ということではなく、私は地域づくりの現場の皆さんが、大学人と一緒に、地域振興につながるような教育プログラムをぜひ考えていただく。そういうような場を作っていただくということを通して、活動が継続、さらに発展していくのではないかというふうに思います。

文科省が、おそらく来年から予算化されると思うのですが、COC、Center of communityという新しい取組を始めます。これはつまり、まさに大学がコミュニティのセンターになる、そのために補助金を出すという事業です。その意味でも大学、アカデミズムという意味では

なく、現場にどのように出ていっていいかわからない、宿泊場所あるいは移動手段等々、本当にわからないことだらけなのですね。ぜひ、そういう意味でも知恵を貸していただければ、お互いにWin-Winの関係になるのではないかなというふうに考えております。

それでは、ちょうど時間になりました。パネリストの皆さん、本日はどうもありがとうございました。今一度パネリストの皆さんに大きな拍手をお願いします。

ありがとうございました。以上を持ちましてパネルディスカッションを終えたいと思います。どうもありがとうございました。

